備える 3.11から

インタビュー

未来の教訓に

東日本大震災後の2011年５月に始めた防災特集「備える　３．11から」は連載200回を迎えた。02～11年の「東海地震特集　備える」を合わせると計300回、20年の長期連載となる。災害や防災をどう伝えれば、命を守ることができるのか。今回は特集として「伝える」をテーマに、さまざまな伝え手とともにインタビューや座談会を通して考える。

ステレオタイプ 壊さなきゃ

映画監督 今村 彩子 さん（43）

―映画「きこえなかったあの日」で、聴覚障害の被災者を取り上げようと思ったきっかけは。

東日本大震災の当日は愛知県内にいた。揺れたのでテレビをつけると海が映ったが、私は（耳が不自由で）聞こえないから地震と海の関係が分からなかった。その後、津波の映像を見て「津波が来る前の海だったんだ」と初めて分かった。

毎日流れる震災のニュースも、聞こえない人たちの情報がほとんどなかった。どんな状況に置かれているのか分からない。自分の目で見たい、伝えたいと思い、震災十一日後に被災地に行った。ある夫婦は津波の警報が聞こえず、別の人に車に乗せてもらってぎりぎり助かった。避難所では別の夫婦が情報を得られず、明らかに困っているのに「みんな大変だから大丈夫です」って。大災害では支援者も手話通訳の人も被災者なので、簡単に助けてほしいと言えないと感じた。

―二〇一六年の熊本地震と一八年の西日本豪雨も取材に行った。

熊本地震では福祉避難所ができた。手話で話せるので避難する人も心にゆとりがあるように感じた。西日本豪雨では聞こえない人たちが広島でボランティア活動を行い、一生懸命がれきを運んだ。すごいなと思ったが、それは自分の心のどこかに「聞こえない人には無理だろう。助けてもらう立場だから」っていう刷り込みがあったということ。それに気づかせてくれた。

―聴覚障害者への災害対応は改善しているか。

少しずつよくなっている。手話言語条例が増え、生活の中で手話が当たり前になってきた。この前、東京のイタリア料理店に行ったらウエーターが手話で「ありがとう」と伝えてくれた。一方で、手話教育が禁止されていた時代があり、手話ができない人もいる。中途失聴とか片耳難聴とかの人は、コミュニケーションや対応の仕方もかわる。手話や筆談ができればOKではなく、その人の背景や歴史を知ることが大事。

―災害に備えるためには普段から顔を合わせ、背景を知ることが大事と。

そうです。相手のことを思って（交流の）キャッチボールができる関係が大事。聞こえる人だけでなく、聞こえない人もどんなボールを投げたら受け止めてもらえるかを考えて。それは本当にお互いさまですね。地元の防災訓練に参加することも大事。聞こえない人がいたら「どうしたらいいのかな」って考えるチャンスになるから。

―災害や防災をどう伝えるか。

私自身の反省もあるが伝え方を間違ってはいけない。当初は困っていることばかり伝えていた。でも困っていることばかりでないし、できることもある。そういうステレオタイプを壊さなきゃいけないと思っている。

被災地での取材経験を話す映画監督の今村彩子さん＝中日新聞社で

いまむら・あやこ　名古屋市出身、在住。愛知県立豊橋聾（ろう）学校から初めて愛知教育大に進学し卒業。米国に留学し映画製作を学ぶ。2021年製作のドキュメンタリー映画「きこえなかったあの日」は文化庁文化記録映画優秀賞を受賞。

西日本豪雨の復旧ボランティアとして集まったろう者たち＝©2021 Studio AYA